

## 東日本大震災のフィールドワーク2最終レポート

### 被災者の「明快でない語り」の姿とは —「語らない」は何を示すのか—

小倉 聡太

はじめに：この授業を履修した経緯

私は、東日本大震災当時の記憶がほとんどない。当時は6歳で、保育園児だった。茨城の県南部に住んでいたため、震災による停電・断水の影響も受けたが、これについても私の記憶はなく、親からの話を聞くことでしか当時、自分が置かれていた状況について知ることができない。また、高校卒業まで、震災について何度も課内・課外活動で扱われたが、同級生と比べ、震災について、特に意識していたことはなかったと思う。

大学入学後何か新しいことを始めたいと思い、新歓に参加していると、東日本大震災の被害の大きかった気仙沼地域に、ボランティア等の活動を通じて現在も携わっているサークルに出会い、それ以来、気仙沼を中心とした東北沿岸地域を定期的に訪れている。その中で、東日本大震災について、新たな視点を持つようになった。それは、震災を未だにどこか遠い存在のように見ているということだ。

東日本大震災の伝承館に行き、震災遺構を見ることで、震災の被害について学び、様々な感情を抱いた。一方で、実際に被害にあった現地の方の話を聞いても、実感が持てなかった。現地の人と会話をする中で、震災時のことについて、その悲惨さ等、ネガティブな話を強調することはほとんどなかった。むしろそこからどのように立ち直っていったかを聞くことで、震災の当事者ではない私は、その人達のパワフルさに尊敬の念を抱きつつ、どこか違う世界の人のように感じてしまうこともあった。震災が尋常ではない被害をもたらした、多くの人とその影響を受けたことは疑いようのない事実だと自分でも理解している中で、その渦中にいた・いる人々の姿をうまく捉えることができているとは思えず、もやもやした気持ちがある。

二年生になり、授業の履修を決める段階で、東北やボランティアについて授業を通じて学びたいと思い、様々なシラバスを読んでいたところで、この授業の存在を見つけた。現地でのフィールドワークの中で、インタビューの聞き手として東日本大震災の当事者から話を聞くことを通して、今現在の被災地・被災者がどんな姿をしているのかを知り、前述した私の経験を違う視点から捉えてみたいと思い、履修を決めた。

#### 1. 本研究における問い

当初私は、「震災前と震災後で、自分の仕事に見出す価値についてどのような意識の変化が生まれたか」という問いのもとでフィールドワークを開始した。これは、私自身の震災に対するイメージと、自分の大きな悩みの一つであるキャリア形成に絡めた問いである。具体的には、大学を卒業したのち、自分自身は社会でどのような役割を担うべきなのかと

いう漠然とした悩みである。被災地で生業を営む人々の想いにアプローチすることで、この問題意識に関連する部分を抽出したいと考えていた。

しかし、フィールドワークを進めていく中で、この問いの前提条件として、自分の中には「被災者であるから、少なからず震災に何か強い思いがある」「自己の経験やそこからくる想いは、自分の生業、特に被災地で自営業を行っている人の生業に大きな影響を及ぼしている」「インタビューをした相手は、回答の程度には差があれど、明快な語りを行う」という思い込みがあったことを、今回の調査協力者である紺野さんの語りを聞く中で、強く感じた。また、第三章で分析している紺野さんの語り方は、自分にとって非常に印象的で、これについて、どうしてそのような語りをされたかを分析してみたいと感じた。そこで私は、今回のインタビュー内容を、調査協力者の語り方に焦点を当て、「震災や自分の人生について、明快に語らないのはなぜか」を問いとして立て、検討していく。

## 2. 先行研究

災害からの復旧・復興において、商業施設の役割は単なる生活必需品の供給のみではない。伊藤（2021）は、東日本大震災の被災地の市街地部を対象に、震災後、個別に移転し再建した商業店舗に着目し、その被災商業店舗全体の中での量的位置づけ、移転の特徴と促進・誘導に際しての課題を考察している。その中で、飲食店について、特に「震災後の地域コミュニティの再構築への寄与」「集客性の高さから期待される、震災後の商業エリアの活性化における役割の大きさ」「震災前から抱えていた営業環境の問題（駐車場の不足や商業圏の変化）の移転再建を通じた解決」等、様々な影響について言及している。

一方で、震災前後で商業施設が地域コミュニティに対して果たす役割は変化したと考えられるが、その変化について飲食店の事業者自身はどのように捉えているのかに迫った研究はあまり見られない。

また、今回の調査手法であるライフストーリーインタビューに関して、私が特徴的な語りとして本研究の主な論点とする「明快でない語り」に関して、既にたくさんの考察がなされている。まず本稿では「明快でない語り」を、以下「からかい、嘘、冗談を絡め、はぐらかしながら行われる語り」と定義する。矢吹（2017）は、自らと同じアルビノの人々に何度もライフストーリーインタビューを行う中で、ここでいう「明快でない語り」をすなわち複数人の語り手についてそれぞれ分析している。

特に、「第9章 介入的な語り手とマイナーな語り手」において、「どのようなストーリーが支配的な文化のなかで支持され、消費されやすいかを理解したうえで、自分のライフストーリーがそこに回収されないように語った」二人の語りで紹介されている。

桜井(2002)は、「対象としての調査者への着目は、調査される側からの批判と調査する側の反省と応答によって促されたものである」としているが、これについて、矢吹（2017）は、客観性や中立性を標榜する科学の欺瞞性が調査者から見透かされていることを示唆している。

そのような中で、矢吹（2017）は、からかい、嘘、冗談を語りの中に入れこむことにつ

いて、「やむをえず本当のことが言えなかった。沈黙するしかなかった」というように、単に消極的評価を行うことについて明確に否定し、自らの意思で、沈黙し、からかい、嘘をつく主体性を評価している。介入的な聞き手に対して、現状を受け入れるか、力強く抵抗するかという選択肢を迫られた語り手は、過去経験をトラウマとして語れない（can't）、というわけではなく、語らない（don't）という行為を行うことで、この選択から脱却しているというように考察している。

このような主張の前提として、前述したように、矢吹が当事者でもあるアルビノが調査対象だったことがある。また、アルビノという特徴は、今回私の調査の軸でもある震災に比べ、先天的で、周りの人の多くが当事者でもない点で、私が調査対象とした「被災地・被災者」と大きな違いがある。また、聞き手である私自身も、前述の通り、当事者ではない。そこで、本稿では矢吹の考察を参考にしながら、「明快でない語り」の特性が被災という文脈においても成立するのかについて考察していきたい。

### 3. 調査の概要

本調査は、令和7年8月19日14時～16時に、麵屋 紺野屋にて、麵屋 紺野屋の店主である紺野学さんに対して行われた。本インタビューには、私の他に同授業を受講している原梨桜さんが同席した。

前述の条件（陸前高田で生まれ育ち、現在飲食店を経営されている方）に合う方にインタビューを行いたく、本授業の指導教員である筒井久美子先生にアドバイスを求めたところ、紺野屋さんの紹介があり、インスタグラムのDM機能で依頼をしたところ、今回の依頼を受け入れていただいた。

実施に際し、事前に昼食を紺野屋で済ませた。その際、軽くご挨拶させていただこうと思ひ、声をかけると、今回の依頼をお忘れになられていたことが判明し、肝が冷えたが、結局依頼通りインタビューを実施することができてほっとした。昼食の際、ラーメンの味だけでなく、器や水槽（魚や小物等）にも注目していた。インタビュー自体は、終始、和やかな雰囲気が進んだ。

### 4. 本調査の結果

#### （1）語り口について

当初、私が持っていた問いは、「震災前と震災後で、自分の仕事の見出す価値についてどのような意識の変化が生まれたか」であった。

私の簡単な自己紹介を終えたのち、今回の意図を説明した後、紺野さんは、以下のよう

\*：紺野さんに、インタビューをしたいと思ったきっかけが、自分の目的について、目的というか興味関心ってところで、その自分の仕事に見出す価値について、その震災を機に変わったことはあるのかっていうのが、その自分が特に聞きたいテーマ

としてあって、その背景として自分が将来の夢がまだなくて、なんかまだ探し中みたいなどころがあって

紺野：弁護士でしょ（笑）

\*：弁護士はない（笑）そこまで責任を負えなくて、怖くてできないんですけど。本当にまだ何も決まってないんですけど、その陸前高田とか気仙沼によく来るところがあって、そこはその気仙沼とか陸前高田とか、そういうところに移住するのもありなのかなとか、東京に行くのもありかなとか。

紺野：気仙沼ならわかっけど

\*：高田でも

紺野：とんでもねえよ（笑）

\*：そうですか？

紺野：マジで。

\*：この二日間くらい、陸前高田、あと二日いるんですけど、陸前高田はすごい魅力的だと思って

紺野：一生懸命やったら絶対後悔するよ。人生最大のミスを（ ）

\*：・・・紺野さんは、高田にお住まいなんですか。

紺野：うん。ずっと地元。

正直、拍子抜けしたという印象だった。自分の問い自体、決して簡単なものではなく、事前にこれを示していたわけでもないため、この時点で何かを明示されるとは想定していなかったが、それ以上にここまで砕けた雰囲気だとは予想していなかった。また、陸前高田に対しても、前記のような印象を持っていることがかなり衝撃だった。ここまで直接的に言われると、どのように言葉を返せばいいのか迷ってしまい、沈黙が少し続いた。これ以降についても、全体的にこのように端的な回答かつ、茶化すような解答がほとんどである。

また、単に軽快なだけではなく、その中のいくつかについて、本当にそのように思っているのか疑義を持つ点もあった。以下本レポートにおいて、特にこの点に注目し、論じていく。

## （2）震災以前について

インタビュー前の段階で、紺野さん及び紺野屋は、メディアに複数回取り上げられており、そこからわかることも多かった。紺野さんは、ラーメン屋の経営を始める前は、陸前高田の高地にあるバーの経営をされていた。一方で、震災をきっかけに、広大な未利用地の活用をしたいという思いから、2022年に紺野屋の経営を始めた。以前経営されていたバーは、いわゆる娯楽の一種であり、被災地に住む人々はもちろん、復興に携わる職人さんからの支持があったことが想定された。そこで、復興現場における飲食店の役割について知るという点でも、協力者としてふさわしいと考えた。

このように、事前に紺野さん・紺野屋について大まかに知ることができていた一方で、震災以前の話や、震災からどのような影響を受けたか等については、事前に調べることができなかつたため、これについても調査の中で尋ねた。

紺野さんは、陸前高田で生まれ育ち、高校に入学したのち、中退をしてから仙台に移り、車の整備士等仕事を転々としながら、生計を立てていた。その際に特にこだわりはなく、本人曰く、高校生だったから明確に何かあったというわけではなかつたそうだ。20歳の時にスナックのボーイとして働きはじめ、お金を稼いだ。その際、様々な店を転々としていたが、やっぱり自分の店を持ちたいと思い、28歳で陸前高田に戻り、バーの営業を始めた。そして、震災が発生したのは、軌道に乗り出したバー経営が始まってから2周年目の時だった。なお、この部分の語りを振り返る中で、震災以前の話（震災が絡まない話）の中では、(1)で示したような疑義を持つような点は、ほとんどないように感じた。

### (3) 被災時について

紺野さんは、震災の被害自体は、陸前高田に住む他の人に比べると、比較的軽度だったそうである。その理由として、実家が高台の、避難所としても利用された高田第一中学校に隣接していたことがあげられる。地震発生時は、バーの2階でキャラクターを模したパジャマのようなものを着ながら寝ていたようで、そのまま外に出たそうである。なおバーは、本丸公園周辺にあり、いわゆる浸水区域にあった。外に出ると、常連のお客さんがたまたま車で避難しており、乗せていただいたそうである。また、この時間はいつも当時の陸前高田市B & G海洋センターのプールで泳いでいたようで、もしそこに行き泳いでいたら、避難の成功可能性は著しく低かつたというようなことも述べていた。津波で店と所有物のほとんどを失った一方で、実家は高台にあったことから、実家の被害は小さく、避難所にいた時間もきわめて短かつた、というように語り、被災時の苦労についてはほとんど言及しなかつた。また、そのような話をする際も、あたかもこちら側を楽しませようとしているかのように軽快に語っていた。

以下は、当該部分の中から抜粋したものである。

紺野：その日はグレムリンの着ぐるみだったんだよね。分かる？ グレムリンって。  
(グレムリンの写真を見せてもらう) これで避難したからね。しかもなんかTシャツとパンツだけっていう。

\*：これ、寝巻きだったんですか。

紺野：そう。ねえ、待ってたら津波来ちゃうから全部流されるからどうしようと思って、高田一中、そこの中学校に避難したんだけど、みんな俺のどこ見るよね。俺だってこんな格好で来たくねえよ。1人ふざけてるな(笑)

今回のフィールドワークでは、陸前高田に3泊4日で滞在したが、その中で、紺野さん以外にも多くの方から震災に関連した語りを聞く機会があった。具体的には、震災遺構の

管理者や、高田松原津波復興祈念公園パークガイドの方に語り部をお願いし、様々な話を聞かせていただいた。どの語りにも特徴があるものの、震災当時の話について、自分の避難時に起きていた津波や揺れ等の自然の脅威や、自己の行動への反省を強調されていた。私たちが和ませるために、冗談を言うような方もいらっしゃったが、どれも話の本質はそこではない。そのような語りを聞いた後だったからこそ、紺野さんの語りを楽しみながら聞いていて、震災による被害が少なかつたとはいえ、なぜこのような語り方をするのか不思議に感じていた。

これについて質問をした際に、紺野さんは以下のように語る。

\*：語り部を主にやられてる方に話を聞いていたので、どうしてもその震災の話とか、あとはなんか教訓みたいな防災への教訓みたいな話が多くて。

紺野：しゃべりたい人がしゃべれば良いと思う。

\*：そうですよね。

紺野：教訓もくそもねえよ、逃げろっていう話だよ。

このような発言から、「震災に関連する出来事について語ることに」対して、距離をとっていると感じた。紺野さんは、インタビューを始める前にご挨拶させていただいた段階でも、「話すようなことはないよ」「DM 来た時には酔っぱらっていてなんかおもしろそうだから OK した」というようなことをおっしゃっており、点と点がつながったような気がした。インタビューを DM でお願いした段階で、その趣旨や概要の説明のために、「東日本大震災のフィールドワーク」という授業の名前について言及していたことも要因の1つとしてあっただろう。

紺野さんにとって語りは、記憶の継承や防災教育の手段というよりも、あくまで個人的な出来事の延長線上にあるものなのだと感じた。自身が受けた震災の被害の程度も影響してはいるだろうが、紺野さんは単に誰かを否定しているのではなく、それぞれが好きなような捉え方をすればよいと考えているのではないだろうか。

#### (4) 震災以後

2011年の3月に被災した一方で、12月には、実家の所有地で、営業を再開することができた。これは、他の店に比べかなり早い再開であったそうである。一方で、再開店してからのバーの経営は、常連客である友人や親族のライフステージの変化や、若者の酒離れ、人口の減少などを理由に、次第に落ち込んでいった。そのような状況の中で、チャレンジショップという、市・商工会議所の創業支援枠を利用し、バーでも提供し、自分の趣味でもあったラーメン作りを武器に、ラーメン屋の経営を決意した。震災直後には、復興工事関係者の来店もあったが、現在は地元客に加え、紺野さんの趣味でもあるツーリングをする方の来訪が多く、SNS（特にInstagram）発信で多くのお客さんに支えられている。

以下は、これについて語った場面である。

\*：趣味でラーメンをやっていたみたいなのが、その、インタビューで見たんですけど。バーでラーメンを提供していたと。さっきラーメンを食べてすごくおいしくて、

紺野：独学だから全然、・修行もしたことないし

\*：あっ、そうなんですか。

紺野：そうそうそう。手抜きいっぱいある。

\*：いや、なんか、

紺野：手抜き、適当（笑）

（中略）

\*：職業、例えばラーメンやるとか、バーやるとか、あとは、趣味でラーメン始めたとか、そういうところにその、家族がいたこともなんか、影響みたいなのってありました？

紺野さん：ないないない。

\*：ないですか。

紺野：やりたいことやった。

そのように語る紺野さんであったが、客層の分析をしていることや、器を佐賀県に行って選んできていること等について語る場面もあり、そこから仕事へのこだわりも垣間見ることができた。また、家族の影響について、他にも子育てや教育について他者にまかせきりというような発言もあったが、結婚して、子供もいて、家にも帰っているというような話をしていることも考えると、真実と差異があるのではないかと疑ってしまう。

自分の本来の問いであった「震災前と震災後で、自分の仕事に見出す価値についてどのような意識の変化が生まれたか」に沿って、震災前後の仕事の内容の変化等についても伺った。

\*：震災前と後でやっぱりお店はずっとやられてたわけじゃないですか、バーとかラーメンとか。で、紺野さんがお店やってて、前と後で変わったことあるとか、何か感じたこととかありますか？

紺野さん：人の種類が変わったとかはあるのかな。うん。気にもしてない。うん。ただ、ねえ、ラーメン屋になってからはやっぱりいろんなところから来てくれるから。高田だけの商売じゃなくなったから。

\*：それは、なんか、震災があったからというよりは、本当にラーメン屋っていうものをやり始めたからってということなんですかね。

紺野さん：・・・・・・津波来なくても、遅かれ早かれ、高田は終わってたよ。津波関係なしに。

「津波来なくても～」と語った後、少し沈黙が続いた。単純に、この言葉にどのような意図があるのだろうかも気になった。しかしそれ以上になんと返すのが正解なのか、頭をぐるぐると巡らせていた。

## 5. 分析と考察

紺野さんのインタビュー簡単にまとめると、①紺野さんが明快な語りをしないこと②語りの中における震災の位置づけを特別なものとしていないこと③陸前高田をポジティブなものとして語らないこと、があげられる。

伊藤（2021）は、東日本大震災の被災地における商業店舗の再建動向について言及していた。伊藤は、商業店舗は地域住民の交流機会を提供すると指摘していたが、紺野屋も都市に比べ娯楽の少ない地域の学生に人気の飲食店という意味で交流拠点を生み出しているといえる。また、商業店舗は商業復興の中心的存在になるという指摘もあるが、遠方から多くのお客さんが訪れている紺野屋にもこの指摘はあてはまる。また、商業店舗が地域課題の解決に寄与するという指摘についても、土地かさ上げにより発生した広大な未利用地の利用を行っているという点で、紺野屋もあてはまると言えるだろう。

一方で、紺野さんは、地域との連携や震災を自分の職業乃至人生と、ある意味「頑なに」結びつけない。そのような明快な語りをしないのはなぜなのかをここで分析・考察する。

「津波来なくても、遅かれ早かれ、高田は終わってたよ。津波関係なしに」と語る節は、前述してきた紺野さんの特徴的な語りの代表例だと言える。前提として、紺野さんはインタビューを通して、陸前高田についてポジティブな語りをしない。私が、陸前高田や気仙沼をいわば「信奉」していることに対する、メッセージの一種なのではないかと感じた。そこに加え、この部分においては、震災を成長の契機とするよくある捉え方や、インタビュー開始時やインタビュー依頼を行った際に提示した私の本調査の目的・問い等への抵抗があったという捉え方もできるだろう。震災を何か大きな存在として語る構成を拒んでいることも明確であり、例えば「ラーメン屋の开店」を紺野さんは、感動のストーリーとして、決して結び付けない。つまり、紺野さんの語りは、外部からの共感や感動のまなざしを前提とする「よくあるストーリー」とは一線を引き、冗談やあっけらかんとした語り口を通して距離を取る実践であるといえる。

そのような「明快でない語り」は、矢吹(2017)が言及している通り、語り手が「語れない」のではなく、「語らない」ことを選び取る「主体性の表れ」の現れとも言えるだろう。こうした語りは、調査者が想定する「被災地」「復興」「再出発」といった枠組みを再構築し、私が「はじめに」で書いた、震災の話で感じる「パワフルさ」とはまた違った形で、被災地・被災者の意志を浮かび上がらせるものである。

改めて、紺野さんは私に対してなぜこのような語り方をしたのかを検討したい。桜井（2002）は、ライフストーリーインタビューにおいて、「対象としての調査者への着目は、調査される側からの批判と調査する側の反省と応答によって促されたものである」として

おり、これについて、矢吹（2017）客観性や中立性を標榜する科学の欺瞞性が被調査者から見透かされていることを示唆している。今回の調査において、震災を成長の契機とするよくある捉え方や、インタビュー開始時やインタビュー依頼を行った際に提示した私の本調査の目的・問い等に由来する私の聞き手としての構えに対する、紺野さんによる抵抗があったと考えられるだろう。また、紺野さんは、私の陸前高田に対する「憧れ」のようなものも見透かしていたといえるだろう。これに加え、「教訓」や「防災意識」という枠組みで過去を整理しようとする私の期待を、やんわりとかわす姿勢が紺野さんの語りの中にあっただ。震災の出来事を「学び」や「意味」として位置づけようとする語り方に対して、紺野さんはあくまで「そのとき起こったこと」として、語るのみでその語り方は、悲劇を感情的に再現することも、経験を一般化することも拒むものだったといえるだろう。

矢吹（2017）は、からかい、嘘、冗談を語りの中に持ち込む場合について、「やむをえず本当のことが言えなかった。沈黙するしかなかった」というような消極的評価を行うことはせず、自らの意思で、沈黙し、からかい、嘘をつく主体性を評価している。そこには、介入的な聞き手に対して、聞き手の構えを受け入れるか、力強く抵抗するかという選択肢を迫られた語り手は、過去経験をトラウマとして語れない（can't）、というわけではなく、語らない（don't）という行為を行うことで、この選択から脱却するものとしている。

この部分について、紺野さんの語りには「語らない（don't）」の実践を見ることができないか。つまり、語るべきものとして社会的に期待される「被災の教訓」や「再生の物語」を、紺野さんはあえて語らない。彼にとって震災は、「忘れられない出来事」ではあるが、「語りによって意味づけるべき対象」ではない。軽い口調で言い切るその姿勢は、外部が理解・共感を安易に行おうとしている姿勢に対する一種の抵抗であると言えないか。

## 6. 結論と課題

本レポートでは、陸前高田におけるフィールドワークを通じて、紺野さんの語りを中心に、矢吹の言及した主体性のある「明快でない語り」の特性が被災という文脈においても成立するのかを検討してきた。当初、私は震災の経験をどのように仕事や生活の中で位置づけ直したのか、つまり「震災が個人の価値観や生き方にどのような変化をもたらしたのか」を明らかにしたいと考えていた。しかし、紺野さんの語りは、これを軽やかに拒むものであった。彼は、震災を語ること自体に特別な意味を付与せず、むしろ日常の一部として淡々と位置づけていた。その語り口は、震災を教訓化し、他者へ伝承しようとするいわば「語り部」の語りは異なっていた。

それは、私自身の語りを聞く姿勢に対する態度の現れともいえる。調査の初期段階で、私は「震災前と後で、仕事に対する意識がどう変わったか」という問いを繰り返していた。しかし、この問いは、紺野さんの経験を震災からの復興の物語として聞くことを前提としている。

このように考えると、紺野さんの「明快でない語り」について、積極的な聞き手への抵抗として読むことができる。彼の語りは、外部の聴き手が期待する「復興」や「再生」と

いった明快な物語を引き受けない。そこにあるのは、沈黙や忘却ではなく、語ることの政治性を自覚したうえで、それを「語らない」意志である。

このフィールドワークは、「はじめに」で言及した私のもやもやの払拭と共に、「語りとは何か」「聞くとはどういう行為か」を根本から問い直す契機となった。私のような当事者ではない人間は、しばしば、被災者の言葉に「真実」や「教訓」を見出そうとする。しかし、そのような姿勢は、語りを一方向的に消費するのみで、聞き手は安全な場からただ聞くのみであるといえる。紺野さんの語りが示したのは、むしろ聞き手は、「わからないままに共にいること」、あるいは「意味づけを保留したまま耳を傾けること」を受け入れ、自らが持つバイアスの存在を認めることの重要性であったのではないか。明快とは言えない語りのあり方は、被災経験を伝えるうえでの誠実な態度の一つであるといえる。

したがって、「明快でない語り」は、震災の記憶を曖昧にするものではなく、むしろその複雑さを正面から表現している。それは、語る側の自己防衛であると同時に、聞く側への問いかけでもあるともいえるだろう。

明快さの中に自分の安心を求めるのではなく、不明快さの中にある語り手の誠実さを受け止めることが、語り手と向き合う際に必要な態度であり、紺野さんのような語り求めるものではないだろうか。また、これにより「はじめに」で言及したような「距離」を感じるのではなく、その人の語りの主体性・意図を共に感じることができ、よりその人の姿を明快に捉えることに、成功したと言えないか。

#### 参考文献

桜井厚, 2002『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

矢吹康夫, 2017『私がアルビノについて調べ考えて書いた本——当事者から始める社会学』生活書院.

伊藤みのり・刈谷智大・姥浦道生, 2021「東日本大震災の被災地における商業店舗の再建動向に関する研究」『都市計画論文集』56号: 1429–1435.

清水建設東北支店取引業者災害防止協議会, 2022『未来をつくる人. 復興進む商業地区の中心で、人気を集める担々麺専門店』<<https://mth-tohoku.com/articlecolumn/1015/>> (参照日 2025年11月23日).